



第 129 回 東方問題③

1 オスマン帝国のさらなる改革

- ・オスマン帝国では、() が実施されて改革が行われていた。
→クリミア戦争後は、オスマン主義をとこなえる「新オスマン人」と呼ばれる人々により、立憲政治を求める声が強くなっていた。

- ◆ () (在位 1876~1909 年)
- ・1876 年、改革派の宰相 () が、アジア初の憲法を制定した。
※この憲法をオスマン帝国憲法 () という。
→しかしアブデュルハミト 2 世は、露土戦争を理由にこの憲法を停止させ、専制政治を開始することとなった。
- ・また衰退するオスマン帝国の存在感を高めるため、パン=イスラーム主義を掲げた。



アブデュルハミト2世

非常に評価が分かれるスルタンである。オスマン帝国の滅亡を早めたとも、近代化をもたらしたとも言われる。



ミドハト=パシャ

ミドハト憲法と呼ばれるのは、彼が宰相として、憲法を起草したためである。アブデュルハミト2世と対立して失脚し、最後は処刑された。



映画『海難 1890』



エルトゥールル号事件

日本とトルコの友好を象徴するエピソードとして、トルコでは相当に有名な事件である。日本人なら知っておきたい話。2015 年に日本・トルコ共同で映画が制作された。

2 露土戦争

- ・19 世紀半ば以降、() に住むスラヴ系の諸民族は、() からの独立運動を行っていた。
→同じスラヴ人の国であるロシアは、スラヴ人の統一と連合を唱えてこの運動を支援し、南下政策を再開した。
※この統一を目指す思想や運動を () という。

- ・1877 年、ロシアとオスマン帝国の間に () が発生した。
→ロシアの勝利に終わり、() が締結された。

(1) ()、()、() が独立した。

(2) () は自治国となったが、事実上ロシアの属国となった。

→ブルガリアの領土はエーゲ海に面しており、ロシアの南下政策はついに成功した。



ロシア皇帝アレクサンドル2世

軍服バージョンの肖像画です。改革の成果が発揮されたのか、露土戦争は圧勝に終わった。海がダメなら、陸から南下。うまくいったと思いきや…。



3 南下政策の挫折

- ・サン=ステファノ条約の内容に、イギリスとオーストリアは猛抗議した。
→ドイツの首相（ ）が、「誠実な仲買人」を自称して仲介に入り、中立国のドイツで（ ）が開かれた。

< (1878年) の主な内容 >

- (1) () は破棄された。
- (2) モンテネグロ・セルビア・ルーマニアの独立は、正式に承認された。
- (3) ブルガリアの領土は縮小され、オスマン帝国の自治国と、オスマン帝国領東ルメリア自治州に分けられた。
→ロシアの南下政策は再び阻止された。
- (4) オーストリアは、() の管理権を得た。
- (5) イギリスは、() の管理権を得た。



ベルリン会議

ビスマルクは、誠実な仲買人と言ってる割には、終始イギリスとオーストリアを支持した。握手する背の高い男がビスマルク、左端で逆を向いてニヤニヤしているのはイギリス首相ディズレーリ。



4 知識人階級の活動

- ・経済発展の遅れたロシアでは、商工業者ではなく（ ）と呼ばれた学生や知識人が、改革運動の中心となった。

- ・インテリゲンツィアには、農民を啓蒙していき、社会を改革しようとする者がいた。
- ・彼らは、「 」というスローガンをうたったため、彼らのことを（ ）という。
→政府の弾圧や、農民の無関心により挫折した。
→絶望した彼らの一部は、（ ）や（ ）（虚無主義）の思想を持ち、過激なテロリズムに走るものたちも現れた。
→1881年には、皇帝アレクサンドル2世を暗殺してしまった。



レーピン作「ナロードニキの逮捕」

ナロードニキの運動は、農民に全く相手にされなかった。この絵は農家で逮捕されるナロードニキを描いたもの。



アレクサンドル2世の暗殺

自暴自棄になったナロードニキは、テロリズムという暴力に走った。左側の男が、爆弾をアレクサンドル2世に投げつける瞬間。



トゥルゲーネフ

ニヒリズムという言葉は、ロシアの作家トゥルゲーネフが、『父と子』の中で初めて使った。『獵人日記』も代表作。